

欽定訳聖書の語法・語彙の

二三について

清 水 護

概 要

- I. God saw the light, that it was good. / Consider the lilies of the field, how they grow などに見る Two Objects を取る構文の性質について —聖書以外の例— redundancy—emphatic, emotional ; 補語的又は副詞的働き
- II. The land flowing with milk and honey を中心に。主語の問題—flow の意味— milk and honey —land of plenty —New Canaan
- III. Butter (*or* curds) and milk (food in destitution) — locusts and wild honey —(luscious)locusts—St. John's Bread (*or* carob-pods) —meaning of fowl and locust —insect ? or plant ?

I

欽定訳聖書 (1611年。Authorized Version. AVと略す) には今日の人々には 解りにくいことばや、古めかしく感じる構文が往々でてくる。そのうちのあるものは、その後の改訂訳 (1881 (新約) —1885年 (旧約)。Revised Version. RV と略す) および更にこれを改訂して読み易くした標準改訂訳 (1946(新約)—1952年 (旧約)。Revised Standard Version. 略: RSV) で一般の人々に分り易いことばに改められたが、あるものは聖書独得の文法または用語としてそのまま保存されてきている。創世記第1章4節: And God saw the light, that it was good. (AV) がその一例で、RV はこのままであるが RSV は And God saw that the light was good. とはじめの the light は省いている。(AV, RV, RSV とは関係

なく、独自の立場から現代英語に訳した New English Bible (1961(新約) —1970年(旧約)。略：NEB) もここは RSV と同じ。) 類似の例は案外多いので、旧新約両書を通じて探したならば、その数は数十にのぼるであろう。そのうちからいくつかを拾って見る：

Genesis 12. 14: when Abram was come into Egypt, the Egyptians *beheld* the woman that she was fair.

2 Samuel 17. 8: Thou knowest thy father and his men, that they be [=are] mighty men. (同じ内容がすぐあとの *2 Sam.* 17. 10 では for all Israel knoweth that thy father is a mighty man…と普通の構文)

Genesis 32. 11: for I fear him, lest [=that] he will come and smite me.

Matthew 6. 28: Consider the lilies of the field, how they grow.

Matthew 6. 25: Take no thought for [=Do not worry about] your life, what ye shall eat, or what ye shall drink.

即ち、主文の動詞が二つの目的名詞（又は代名詞）とそのあとに名詞節をとり、はじめの目的語とあとにくる名詞節の主語が同じ（形は違っても内容は同一と見られる場合も含める）であると見られる構文を問題にするのであるが、同様の構文はシェイクスピアにもたびたび見られる：

Lear 1. 1. 272: I know you what you are. (「わかっています。あなたたちどういう人か」 Cordelia がことば巧みな姉たちに言う台詞)

Richard II 3. 3. 61: March on and mark King Richard how he looks. (ボリングブルックが、これから城門まで行って、強硬な和解条件を城内の王リッチャードにつきつけてやろう。そのとき王はどんな顔をするか見たいわいというところ)

Twelfth Night 1. 2. 53: Conceal me what I am, and be my aid…

(「わたしの身分を知らさないで、助けて下さい」 処女の Viola がこ

れから男装して冒険しようとして助けを船長に求める)

Charles Wordsworth (詩人 William Wordsworth の甥にあたる) は
 こういう用法について

“The idiom is one supposed to be borrowed from the Greek. It is certainly frequent in the ancient Greek authors, especially the tragedians” (*On Shakespeare’s Knowledge and Use of the Bible* (1864年), p. 19)

といているが、必ずしもギリシャ語をまねたものではないらしく、もっと古い英語にもぼつぼつ類例が見られる。1300年頃の作と思われる *Cursor Mundi* (「世界を走る者」の意。聖書に取材) には “We know this man that he is without sin” (この人に罪はないことがよくわかっている) という例がある。こういう構文はだいたいにおいて see, know, hear に類した知覚、思考に関する動詞に多いようで、とくに聖書に頻出するが、一般の英語としては17世紀以後はあまり用いられなくなった。比較的新しい近代作品の中から気づいたものをいくつか挙げると—

Milton, *Paradise Lost* II. 990: I know thee, stranger, who thou art—That mighty leading Angel [i. e. Satan] … (旅のおかた、あなたがどなたか存じています—あの偉大な天使の首領ですね) (Satan が the Anarch old (擬人化された「暗の首領」に道を聞いた時の後者の答え)

Dryden, *Alexander’s Feast* 133—4: See the snakes that they rear, How they hiss in their [i. e. the Furies’] hair.

(見よ、フェーリーズの頭に宿したへびの群のざわめきたけるを。(Furies は三人の復讐の女神で、頭髮はへび。楽士の音楽に魅せられて、この蛇がしゅっしゅっと音を立てて騒ぎだしたさまを描いたところ))

Tennyson, *In Memoriam* LXXIV, ii: So, dearest, … I see thee what thou art, and know Thy likeness to the wise below.

(だから、いとしい君よ、君がいかなる人であるか、私は心得ている。

そして地上の賢人に似た顔であることも知っている)

僅かな例であるが、こういう構文が使われるのは詩文においても相手に語りかける時の、やや emotional なことばに多いようである。テニソンの文体にはもちろん聖書の影響が著しいが、今引いた句のすぐあと：

‘More than my brothers are to me’ —

Let this not vex thee, noble heart !

I know thee of what force thou art

To hold the costliest love in fee. —LXXIX, i

にも同様のことが伺われる。ここは「気だかき君よ」と呼びかけて、「君は（我が）兄弟にもましていとし」とかつて私の言ったことばに心を傷めないでほしい。君はどういう強い力でこの私を捕えて、比類なき愛情に包まれているのか、私にはそのわけがわかっているのだから、との意味で、やはりかなり情緒的文脈の中である。

I know you what you are のような場合、*know* の目的語として *you* と *what you are* という *clause* との二つがあり、はじめの *you* は無くてもよいところから、こういう目的語は *Redundant Object* (余剰目的) と呼ばれるが、心理的には自然な構文であったとも考えられる¹。即ち *I know you* といったあと — (*I know*) *what you are* と補語的あるいは副詞的に追加された形とも見られよう。一般の英語でも *Forgive me.* / *Forgive my sins.* 何れも単独で使えるが *Forgive me my sins* とも云える。*Forgive me* といった場合、*me* は直接目的と見られるので二つ併せた場合 *forgive* は *me* と *my sins* と二つの直接目的語をとっている

1. Expressions like “The Egyptians beheld the woman that she was fair” (Gen. 12. 14) are now restricted to the Bible; but in the early periods of English this construction was quite common.—L. Kellner, *Historical Outlines of English Syntax* § 94. なおこの構文について、二十数年前のことであるが越智文雄氏が同志社大学の機関誌で論じておられたことを記憶する。手許に資料がないのが遺憾である。

とも見られる。Hear me. / Hear one word. → Hear me one word. // I envy you. / I envy your beauty. → I envy you your beauty.なども同様に見られる (Jespersen, *Modern English Grammar*, III.14. 9)。然しこういう場合、単独ではそれぞれ直接目的でも、二つ連なると I envy you — (I envy) your beauty. とあとの句は補足的に解されるのではなかろうか。(もっとも二つ連なった場合、弱い音の me あるいは you は間接目的語と受取ることもできよう。(Cf. He asked me. / He asked a question. → He asked me a question : He asked a question of me.)

聖書に多い Redundant Object の形に戻り, *John* 9. 8: They which before had seen him that he was blind … というような文について考えると、二つの目的語(句)の主体はこの文にも見られるように同一なのが普通である。したがって *Luke* 24. 39: Behold my hands and my feet, that it is I myself. は不自然に感ぜられるであろうが、手足の主と it (= what you see) とは同一なのでここに含めて差支えないと思う(上掲 *Matt*. 6. 25 も類例)。それにしてもここに that があるのが目ざわりで、原文は *hoti* であるが、AVのテキストは直訳と見てよい。この *hoti* はいろいろに訳されている一方、省かれてもいる。New English Bible はこれを省略して Look at my hands and feet. It is I myself. と二つの文に分けている。New International Version (NIV) (1973年)、Moffatt 訳 (1913年) も同型。New American Bible (1970年) はセミコロンで二文をつなぐが同型と見てよい。Goodspeed (1931年) が for でつないだのは必ずしも成功したとは云えない。Jerusalem Bible (1966年) は …, Yes, it is I indeed で、emphasis を表わそうと苦心の跡がうかがわれる。驚いたのは The Amplified Bible (1957年) で、再び AV と同じ訳に戻っている。*Twentieth Century N. T.* (1904年) の …, and you will know that it is I. は長すぎる嫌いがあるが、原文の気持は伝えているのであろう。むしろ and you will know that を省いて Weymouth (1902年) のように ダツシユに気持を含めて See my hands and feet — it is my very self とする方が自然な英語に

なるようである。

この *see* とか *consider* 等続く *redundant objects* をとる構文は、今日の一般の英語としては見られなくなり、また AV, RV, ASV (1902年の American Standard Version) などには残っていても、RSV になるとこれを避ける傾向もあるが、いくつかの現代英語訳を見ると、同じ聖書についてさえ、必ずしも統一はないようである。また *Gen. 12. 14* をとって見ると、NIV では普通の文体に改めて *the Egyptians saw that she was a very beautiful woman.* としているが、Jerusalem Bible は *the Egyptians did indeed see that the woman was very beautiful.* / Moffatt 訳は *the Egyptians did notice that the woman was very handsome.* と強意的表現として扱っているのが注意をひく。NEB の *The Egyptians saw that she was indeed very beautiful* にも、原文の構文に対して特殊な意味合いを持たせているようである。

ところで、*Genesis 32. 11* は RSV, New American Standard Bible (1960年。略: NASB), Amplified Bible では AV, RV と同様に *for I fear him, lest¹ he come...* であるが、Jerusalem B. はこれを *for I am afraid of him; he may come and attack us...* としており (cf. NEB: *for I am afraid that he may come...*), また *I Sam. 17.8* も NASB, Smith 編訳, Amplified B. では *You know your father and his men, that they are...* とあるのを NIV は *you know your father and his men; they are fighters...* とセミコロンの二つに分けているのは、*Luke 24.39* に関して既に見たところと符合する。

Amplified B. は *Matt. 6. 25* では古い文体を踏襲しながら (cf. Twentieth Century N. T.: *Do not be anxious about your life here—what you can get to eat or drink*), *6. 28* では *Consider the lilies of the*

1. この 'lest...' の用法については「現代英語訳聖書 (数種) を通じて見た Subjunctive の用法」(東洋英和短期大学『英米文学研究』第二号(pp. 9-15)) 参照。

field *and* [orig. ital.] learn thoroughly how they grow. としたのは、やはりこの原文の構文に違和感をおぼえたためであろう。

以上二つの目的語句が来る場合、あとの方は補語的に又は副詞的に見られる可能性について触れたが、*Matt. 6.25* において New American Standard Bible が第二の clause の前に *as to* を入れていること、また Goodspeed が *wondering* を加えて二つの節の関係を明示していることはこの古い構文の性質を理解する上で有力な参考となろう：

NASB : do not be anxious for your life, *as to* [orig. ital.] what you shall eat, or what you shall drink ; nor for your body, *as to* [orig. ital.] what you shall put on.

Goodspeed : do not worry about your life, *wondering* what you will have to eat or drink, or about your body, *wondering* what you will have to wear.

II

出エジプト記 3 章あたりからレビ記・民数記・申命記・ヨシユア記等にまたがってしばしば用いられる句に a land *flowing with* milk and honey 又は a land *that floweth with* milk and honey がある。即ち約束の地カナンの豊かさをうたった句で「乳と蜜の流れる国」として邦訳聖書でもなじみの深いことばであるが、英語では流れる主体が milk and honey ではなく、(the) land であるのはおかしくはないかとの疑問が湧く。欽定訳聖書ではこの句はすべて the land を主語に訳しているようで、*flowing with* でも *that floweth with* でも意味は全く同じと考えてよい。ところが英語にはこれに似た不合理と思われる言い方がいくつかある。どの動詞でも、どの主語でもよいというのではない。たとえば「庭に木を植える」を *plant the garden with shrubs* と言う。これは *plant the shrubs in the garden* と同じで、両方差支えない言い方である。「庭に蜂が群がって居る」も *bees swarm in the garden* でも、*the garden swarms with*

bees でもよい。売り手買い手でごった返しの市場を、マコーレーはその *History of England* (ix. II) の中で *a market-place swarming with buyers and sellers* といっている。そのほか hovels *crawling with vermin* (のみ、しらみがぞろぞろ這っている小屋) のように *crawl* という動詞もこういう風に使われ、虫のように小さなものがはうのに言うかと思うと、H. G. Wells の例には (Germany) … *It's all crawling with soldiers* (どこへ行っても兵隊がうようよしている) のように人間にも使う。しかし、いろいろの例を見ると、流動性、蠢動性のものについて用いられるのが多いようである。「汗をたらたら流して」(流汗淋漓) という場合の例: *both men were tired out and running down with sweat* (Jesp. より)。涙について(流涕): *her face was streaming with tears now* (Maxwell)。水(血)などが滴たり落ちる場合: *his hand was trickling with blood* (Dickens)。このように見て来ると、*the land flowing with milk and honey* は英語の *genius* に合った言い方で別に異とするに足らないことになる。

ところで、こういう動詞の使い方を詳しく論じているイエスペルセンの *Modern English Grammar* (Vol. III. 11.5₂) にも当然旧約聖書のこういう用例は挙っているものと思って調べて見たが見当らない。Oxford English Dictionary (OED) に当たって見ると 'flow with' の見出しで、*abound in*、*overflow with* と説明しているので、イエスペルセンは聖書の用法もこの意味にとってほかの諸例とは別扱いにした、即ちふつうの自動詞の意に扱ったものと解釈される。ほかの大小数種の英和辞典、英英辞典、何れもこれを *overflow (with)* と解している。さらに OED はこの意味で用いるのは *Biblical phrase to flow with milk and honey* に限られているようであるとしている。1382年の Wyclif 訳 *Exodus* 3. 8 には *A loond (= land) that flowith (= flows) mylk and honey* とあるが、これは Vulgate の *in terram quæ fluit (= flows) lacte (= milk; cf. lactogen) et melle (= honey)* を直訳したものらしく、この *fluit* を *flows* と訳すと英語としては他動詞となり「…を流させる」ことになるので、不自然と

感じたのであろう、1388年の Wyclif の改訳では *that flowith with* と改めている。(OED は Wyclif のはじめの訳を Vulgate の barbarism (反則語法) をまねたものと見ている。後記参照)。これ以来英訳聖書では一つの伝統的訳文ができたと思われる。意味はもちろん比喩的で *abounding in* である。ここではいくつかの現代英語訳聖書の訳文を比べて見よう。比喩的意味を強く表わしたのは Ronald Knox 訳 (1944) : *to take them away into a fruitful land and large, a land that is all milk and honey*. Smith 編 *An American Translation* (1931年) および Moffatt 訳は *a land abounding in milk and honey*. しかるに最近の *Good News Bible* (1976年) では *to a fertile and spacious land, one which is rich and fertile* となっていて、ことさら伝統的イメージを与える表現を避けた感があり、ここはむしろ拙訳である。Living Bible (1971年) は *into a good land, a large land, a land 'flowing with milk and honey'* とわざわざ引用符でかこんで伝統に敬意を表している。新しい訳としての *Amplified Bible* は *to a land good and large, a land flowing with milk and honey—a land of plenty ; …* と伝統を重ねつつ、*Amplified* という自己の標榜するタイトルに忠実に *a land of plenty* と明確に意味を補っていて、好感が持たれる。伝統に捉われない訳文で注目される *New English Bible* も、*New International Version* も、*New American Standard Bible* も *(in)to a good and spacious land, a land flowing with milk and honey* である。

以上で見ると大勢は *abounding in, rich in* の比喩的意味で、即ち *overflowing with* の意味で *flowing with* が使われていることになるが、多くの現代語訳の中で、ただ一つ *Jerusalem Bible* は *to a land where milk and honey flow* としている。ここではたしかに *milk and honey* が主体として「流れ(てい)る」(勿論比喩的であるが) と解している。欽定訳聖書でこの句が使われているのは

Leviticus 20. 24 ; Numbers 13. 27, 14. 8, 16. 13, 14 ; Deuteronomy

11. 9, 26. 15, 27. 1, 31. 20, *Joshua* 5. 6 (以上 *the land that floweth with...*)

Exodus 3. 8, 17, 13. 5, 33. 3; *Jeremiah* 11. 5, 32. 22; *Ezekiel* 20. 6, 15 (以上 *a land flowing with...*)

がおもな場所であるが, *Jerusalem Bible* は2カ所を除いて他は全部 *where milk and honey flow* となっている。この例外というは *Numb.* 13. 27 と同じく 16. 14 で, 伝統に従った訳になっている。後者は同じ句が13節と14節と続くので変化のためあとの14節に手ごころを加えたのであろうと想像する。それはとにかく, *Jerusalem Bible* がここの *flow* をほとんどすべての場合に…が流れる意味に解しているのは興味のあるところで, 英語の語感から言えば必ずしもこれを *overflow (with)* の意にとらなくてもよいことを *Jerusalem Bible* は裏付けているように感ずる。

もちろん, *flow* と *overflow* の差は紙一重で, 特別問題にするに足らないとも考えられる。念のため *flowing* … と訳しているここの旧約の原語はどうなのか調べて見ると, 動詞 *zub* で, *flow* とか *gush* の意で *Psalms* 78. 20: Behold, he smote the rock, that the waters *gushed out*, and the streams overflowed (AV) の *gushed out* はこれで, 続く *overflowed* は別の語を訳したものである。 *Zub* は「流出」の意が第一らしく, とくにその Participle はあとに *milk and honey* を伴って約束の地カナンの *abundance* をうたう成句として用いられると説明されている (Driver, Brown and Briggs, *Hebrew-English Lexicon*, p. 264)。 Gesenius の *Heb.-Eng. Lex.* (p. 274) には同じ内容であるが, “Especially also of *affluence*, abundance with acc. [usative] of that *with which anything flows or overflows*” のあとに *Ex.* 3. 8 の原文を引いて *a land flowing (with) milk and honey* と添えてある。ここで *with* が括弧に入っているのが意味深長で, 話は上に見た *Vulgate* の *fluit* の直訳と見られる1382年と改訂された1388年の *Wyclif* 訳にもどることになる。これには原文の構造に問題があるわけで, *OED* が *Vulgate* の *barbarism*

と呼んだ根拠はこの辺にあるらしい。しかしながら with を加えて a land flowing with milk and honey とする句は、原文にも近くて又英語としても充分受入れられるものである。Living Bible 訳の如く引用符で囲むのもいわれのあることであるが、flow を overflow というやや静的な意味に解するよりも Jerusalem B. のごとく where [rivers of] milk and honey flow と、動的に解する方が、聖書のイメージとしては一層美しいように思われる。また事実、そういうイメージを描く人が多いのではなからうか。

さて、イスラエルの民は約束の地カナンを a land of plenty として憧れ、新しい天地を夢みてこの地に住みついたが、理想を追いながら新世界アメリカに渡って来た清教徒たちはその開拓した New England を New English Canaan または New Canaan と呼んだらしい。1630年代前後のことであるが、Thomas Morton という落付きのない男がいて、インディアンに銃を売ったり扱い方を教えたりして、あとで英人側にたいへんな迷惑をかけることになる(このことについては佐瀬順夫著『ピルグリム・ファーザーズ』1980年。松柏社, pp. 248 f. 参照)が、この男の著書に *New English Canaan or New Canaan, Containing the Abstract of New England* (1637年) (Abstract は抄録) があるので、当時の開拓者たちが約束の地のような気持で移り住んだ新しい土地をどう思っていたか想像がつく。白人たちは新しい土地で原住民のインディアンから生活の知恵を学んだらしいが、ニューイングランドからカナダにかけてはとくに maple が多く (maple はカナダの国章)、原住民たちはこれから (maple) sugar を作ることをおぼえていたので、彼等は火薬の代りに maple sugar や molasses (糖蜜) の造り方を教えたという。1863年出版の 'G. Hamilton' の *Gala-Days* には A land flowing with maple molasses and sugar という句がある。G. Hamilton はペンネームらしく、著者の素性を審にしないが、これは正に New Canaan 即ち New England (又はCanada) 関係の記述であろうと想像する。ここにも旧約のあの句は新しい衣を着て生きている。

III

先年ギリシャを訪ねた折、アテネから霊山パルナッサスの懐に抱かれていますデルフィの遺跡を見に早朝からバスで出かけたことがある。途中ギリシャの乾き切った痩せ地の風情を堪能しながら、あれこれと思いをめぐらしていると、ふとオリーブの灌木のしげみやその他荒地に特有の thorn-bush (いばらのやぶ) の間に点々と山羊らしいものの姿が目にとまった。こんなところでも家畜を飼って、と考えこんでいると、何か白っぽい四角な箱らしいものが十数箇も地面に並んでいる横をバスが駆けぬけた。相当のスピードで走っているので、あっという間であったが、聞いて見ると蜜蜂の巣箱であるという。こういう半ば不毛の地にも養蜂は可能と知って、はっと思い当たったのが「乳と蜜の流れる国」である。乳と蜜は豊かな生活の象徴のように思っていたが、パレスチナの中南部の砂漠に近い環境と、目のあたりに見る山羊(?羊)(乳がとれる)を飼い蜜をとっているこのギリシャの瘦地とは極めて相似たところがあるように思われ、乳と蜜とは本来は遊牧民のたよりにした(実は粗末な)食糧ではなかったか。憧れのカナンはこの食べ物が豊かに与えられる歓びの地である、というのが真意ではなかったかとの疑問を抱くに至った。同時に思い浮べたのはバプテスマのヨハネが、いなごと野蜜とを食えりというマタイ伝その他の描写である。行者ヨハネの生命をつないでいた「いなご」(これについては後述する)と野蜜は正に素食の象徴で、乳と蜜と同列ではないかと思う。

パレスチナはメソポタミヤからエジプトへ跨がる the great fertile crescent (大半月形沃地帯)の西部にあり、古来隊商の通路にも当たっていて、しばしば戦禍の巷と化したことは旧約物語に明らかなるところである。そこで再び乳と蜜に戻って、この二語と密接な関係のあるイザヤ書7章21—22について考えたいが、内容が複雑であるので、その背景となる7. 15—20も含めて要約するとおおよそ次のようになろう。—やがてイマヌエルと名づ

けられる男の子(これは直接には王へゼキヤのことと考えられている)が生まれるであろうが、そのうちアッシリアの王に襲われることになろう。その時にはエジプトとアッシリアとから兵隊が雲霞のごとく攻め入って来て(互に戦い)ユダの地の谷といわず岩のさけ目といわず、いばらのしげみといわず侵入して荒してしまい、ついに畑地はただの牧草地となり果てる。(21節) その時、人は一頭のめ牛と二頭の羊を(細々と)飼うことになるが、*milk* は豊かにあるので *butter* と野蜜を食べて生命をつなぐ。

7. 21—22 (AV): And it shall come to pass in that day, that a man shall nourish a young cow, and two sheep. 22 And it shall come to pass, for the abundance of *milk* that they shall give he shall eat *butter*: for *butter* and *honey* shall every one eat that is left in the land.

ここで *butter* と訳されていることばは、他の現代英語訳では *curds* とする例が多く、凝乳とか乳酸と訳されているが、ヨーグルトに似たもので、乳製品であることは間違いない。従って *milk* and *honey* を食べて生きて行くことになり、ここは困窮生活を意味していると解すべきであろう。*land of plenty* の象徴は *land of scanty* ともなる訳であるが、この方が本来の姿であったのではなかろうか。7. 15 にも *Butter and honey he shall eat* とあるが、やはり同じく窮乏生活の描写と見られている。

上に触れた修験者としてのバプテスマのヨハネについてマタイ伝 3. 4 は *and his meat (=food) was locusts and wild honey* と言っている。耐乏生活を意味するこの二つの食物について、*locusts* はふつう「いなご」と解されている。この昆虫はアフリカからアジアにかけて多く見られ、聖書ではとくに天日暗しとまで大群をなして田畑をおそい、大災害をもたらすのでおそれられているが、乾燥させて食用にすることも周知の事実である。したがってヨハネがいなご(と野蜜)を食べていたというのは何等不思議はない。しかるに *Othello* I. iii. 354f. には、オセローが今は甘い新婚の喜びに酔っているがやがてその喜びもコロシントのような苦汁に変

るだろうよと、ロデリーゴをなだめながら冷やかに語るイヤゴのことはある：

the food that to him now is *as luscious as locusts*, shall be to him shortly as bitter as *coloquintida*.

この *locusts* は *coloquintida* とともに地中海沿岸に多く生育する同名の植物の実で、汁は甘く、食用として愛用されるという。しばしば *carob-tree* (「さいかち」の類) のことと説明され、*St. John's bread* の別名もあることを考えると、一方にはヨハネは昆虫の *locust* ではなく、同名の甘い実を食べていたとする見方もある。念のため OED を調べて見ると、この見方は一応注目に値するようである。この辞典は、「もともと昆虫を意味していたギリシャ語の *akris* は (ギリシャからエジプトまでの地中海東部沿岸諸国地方の) レバントでは、どこかその形が似ているところから、*carob-pod* の名としても用いられるようになった」との説明のあとに

and from the very early times it has been believed by many that the 'locusts' eaten by John the Baptist were these pods...

(pod は植物の (裂開) 果実)

と明記している。シェイクスピアはオセローの喜びを表わすのに、芳醇で甘美を思わず *luscious* という語を用いたが、これは詩的修辞による誇張で、実際にはウェブスター大辞典にもあるように、この *locust* の味は *sweetish* (甘味をおびている程度) らしい。さらにこの *carob-pod* は家畜の飼糧にもなることを思うと、ルカ伝15章の放蕩息子の話も思い出されて、これは、荒野の行者の食べ物として相応しい気がする。

Cheyne 編 *Encyclopedia Biblica* は、*St. John's Bread* という名は、敬虔な巡礼たちが、聖ヨハネが「いなご」を食べていたなどという汚名を拭うために、*carob* の実を食べていたのであるとしてこれにつけた名であるという話を紹介して、巡礼たちの実感 (*realism*) の方が往々学者の知識より価値があると言って、この見方を支持している。然るに、Hastings の *Dictionary of the Bible* は、福音書のテキストにはこれを裏書きす

る根拠はないし、また（その辺の）荒野に carob-tree は生えていない、としてこれを否定している。しかし同時に放蕩息子がこれを食べたのは疑う余地がないと言う。結局、ヨハネが荒野で食べていたのは carob の実か、いなごかの問題は賛否相半ばする¹ 感がある。

ところで、どこまでもヨハネの locust は昆虫であると主張する人々の一つの根拠はレビ記11章にある。この章には儀式上の Clean and Unclean Animals の区別について説明があり、20節以下には食べてよい昆虫と然らざるものの名前をあげている。今1885年の Revised Version から引く：

20 All winged creeping things that go upon all four are an abomination unto you. 21 Yet these may ye eat of all winged *creeping things that go upon all four*, which have legs above their feet, to leap withal upon the earth; 22 even these of them ye may eat; the *locust* after its kind, ... and the cricket after its kind, and the grasshopper after its kind. (羽があつて四つの足で歩くすべての這うものは、あなたがたに忌むべきものである。21 ただし、羽があつて四つの足で歩くすべての這うもののうち、その足のうえに、跳ね足があり、それで地の上をはねるものは食べることができる。22 すなわち、食べてよいものは、いなご類、...こおろぎの類、ばったの類である。)

以上で locust をいなごと取る根拠がつかめたと思うが、ここで視点を変え、欽定訳聖書の英語の用法について考えてみたい。

上に引いた Revised Version のテキストは、1611年の Authorized Version の古い用法のうち、とくに解りにくくなつたものは平易な語句に改めたものである。レビ記11章20は AV では

All *fowls* that creep, going upon all four, shall be an abomi-

1. Thayer の *Greek-English Lexicon of the New Testament* は支持派、Bauer の同名の辞典は否定派である。

nation unto you.

であった。この 'fowl' について考える。AV には古い意味を持ったことばがたくさん保存されている。その内の一つ meat=food の例はすでに見た。この 'fowl' は今では家禽、とくににわとりを云うが、もとは鳥 (bird. 古くは *brid* と綴った) 一般を指していた。この意味は *fowler* (野鳥猟者) に残っている。古典語では *fugol*, ドイツ語では *vogel* (wandervogel は渡り鳥のこと), ずっと元をただと *flug* 即ち *fly* の意味をもった語から来ている。そこで AV のレビ記 11. 20 であるが, All fowls を all birds と読み直した場合, 四つ足で這うすべての鳥とは一体何であろうかという事になる。AV の古語を専門に扱った辞典, 例えば J. Eastwood and W. Aldis Wright の *The Bible Word-book* を見ても, Chaucer その他の作家からの birds の意味に使われた例は見られるがその他の意味には触れていない。しかし OED を見るとさらに広い意味ですべての winged creatures を指したことが明らかになる。1382年の Wyclif 訳に Vulgate の直訳が目立つことについては, すでに 'flow' を問題にした折一例を引いたが, 同じ Wyclif の経外典 *Ecclesiasticus* 11. 3 には short in *foules* (=fowls) is a bee とある。ここは Vulgate の *brevis in volatilibus est apis* を移したものと思われる (brevis=brief, short. 'volant' (=flying), 'volatic' ((古)=winged creature), 'volatile' ('bird,' 'butterfly' なども意味した) など何れも Lat. *volāre* 'to fly' から) が 1611年の AV では The Bee is little among such as flie と改められていて問題はない。Wyclif の頃には飛ぶものは昆虫も含めてすべて fowl と呼び得たことが判る。そういえば14世紀の終り近くの作品にも *briddes and foules* (=birds and fowls) と二つ並んだ例がある。これも羽で飛ぶものをすべて意味しているようである。Wyclif で *foules* とあったのが 1611年の AV では such as fly 即ち flying things と言い換えているので fowl はもうこの意味では通じなくなっのかと思うと 1613年の Samuel Purchas の *Pilgrimage* には They offered to him [the Sunne] *Fowles*,

from the *Butter-flie* to the *Eagle* という文例がある。恐らくこれは見聞録で、著者は人々が蝶から鷲にいたる各種のつばさのあるものを太陽(神)に捧げている光景を見たのであろう。こういう意味で *fowls* が使われているのであるから、この著書より2年前に出た AV に、*locust* を含めて *all fowls*… とあっても格別異とするに足りないのかも知れない。1952年の Revised Standard Version ではレビ記 11. 20 を *All winged insects that go upon all fours are an abomination to you.* (1970年の New English Bible: *All teeming [i. e. swarming] winged creatures that go on four legs shall be vermin [i. e. harmful things] to you*) となっているので、主語の部分の疑問は解消する。

「四つ足で歩く」は今は *go on all fours* とすべきで、この点 RSV は行き届いているが、そもそも鳥や昆虫が四つ足で歩くという(「四つ足の上に跳ね足があって…」は3対の足を認めているが)のはどういうことであらうか。現代英語訳のほとんどすべてが Vulgate 以来の訳語 (*super quatuor pedes*) を持ち回っているのに関して、さすがに *Interpreters' Dictionary of the Bible* (Vol. II. Insectsの項) は、これは聖書が書かれた時代が科学以前の世界であったことを物語るもの ([It] illustrates the prescientific character of the biblical age) と説明して現代人の共感を呼んでいる。それにしても Good News Bible が、その翻訳精神に則って、これだけ長い間の桎梏を脱ぎすてて *Lev. 11. 20—21* を *All winged insects are unclean except those that hop.* (22 *You may eat locusts, crickets, or grasshoppers*) と簡明な訳文としたのは英断といえよう。

Notes on Some Syntactical and Semantic Features of the Authorized Version

Mamoru Shimizu

I

Sentences such as “God *saw* the *light*, that *it* was good”; “*Consider* the *lilies* of the field, how *they* grow”, in which a single verb (in many cases ‘of perception’) takes two objects— a noun or pronoun and a noun clause in which the subject is identical (in substance) with the first object— are said to be exclusively Biblical in contemporary English, though quite frequent in older and early modern English, e.g. “Mark King *Richard* how *he* looks” (*Richard II*). Similar examples are, however, observable not infrequently in later English, esp. in poetry, e.g. in Milton, Dryden, Tennyson— “I *know thee*... who *thou* art” (*Paradise Lost*); “*See* the *snakes*... how *they* hiss” (*Alexander’s Feast*). In such cases, one of the two objects is counted as ‘redundant’. There is a tendency in modern versions of the Bible to omit such ‘redundant objects’. There seems to be little difference in meaning caused by the omission. Stylistically speaking, however, what seems dispensable may help the subsequent clause have emphatic or emotional tone, functioning as adverbial or complimentary component.

In “*Behold* my *hands* and my *feet*, that *it* is myself” (*Luke* 24. 39), the conjunction *that* sounds rather disturbing. In such a case, Weymouth’s half emotional and half emphatic “*See* my *hands* and

feet— it is my very self” may be taken as carrying the meaning close to the original. The various renderings of *Matt. 6.25* (AV: Take no thought for your life, what ye shall eat, or what ye shall drink) into “Do not *be anxious* about your *life* here—what you can get to eat or drink” (Tw. C. N. T.), “do not be anxious for your life, *as to* what you shall eat...” (NASB), or do not worry about your life, *wondering* what you will have to eat or drink” (Goodspeed) would seem to be very suggestive in construing the particular time-honored construction.

II

With regard to the recurrent symbolic sentence “(to) the land flowing with milk and honey”, there arises a question if it is not parallel to such structures as “The hovel was crawling with virmin”; “His clothes were dripping with water”. Dictionaries usually explain *flowing with* as ‘overflowing with’ to the exclusion of other interpretations. But renderings such as “the land *where* milk and honey *flow*” (Jerusalem Bible) seems to favor the question. In translating the original word corresponding to ‘flow (with)’, there seems to be an influence of the Vulgate’s barbarism (‘fluit’) of the Hebrew *zab* (‘gush’, ‘flow’). Further, there may be only a slight difference between ‘overflow’ and ‘flow on’. But the image derivable from “the land where (rivers of) milk and honey flow” may be said to be more to the liking of many people than the static picture of a land which is rich or abounds in milk and honey.

In connection with Canaan, the promised land, the land of plenty, it is of some interest that New England used to be called New

Canaan, and that we read of 'a land flowing with maple molasses and sugar'.

III

'Milk and honey' is usually associated with the land of plenty, such as the Israelites are supposed to have aspired to. But there is a possibility of their being a wild land's food. In *Isaiah* vii, 'butter (*or* curds) and honey' are obviously taken as food in destitution. Somewhat similar are St. John's 'locusts and wild honey'. Interpretations are divided concerning 'locusts', whether they are what are called 'St John's Bread (carob-pod) or the 'insects' which were and are being eaten often dried. *Leviticus* xi. 20ff. is considered to be the authority on which John's 'locusts' are taken as insects, which are involved in the term 'fowl' in AV.

As to the meaning of 'fowl' —birds and winged creatures including 'locusts'. The mystery of insects going on four legs—a prescientific description of the biblical age.